福岡教育大学紀要，第63号，第５分冊，83―93（2014）

幼児期における文字指導に関する一考察
～園における実態調査に基づいて～

A Study on the Teaching of Writing in Early Childhood
―Based on the Survey in Kindergartens and Nursery Schools―

巣　立　早　希　　和　田　圭　壮

Saki SUDATE　　Keisou WADA

（本学大学院 美術教育専攻）　（美術教育講座）

平成 23 年 3 月修了生）

（平成25年９月30日受理）

1　はじめに

幼児期は文字に興味をもち始め，読んだり書いたりし始める重要な時期である。

しかし，現行の「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」の定める規定では，直接的な文字指導というのは小学校に入学してからの指導が前提で，「読み」「書き」については具体的に述べられておらず，その指導のあり方は実に曖昧で，園によってもバラつきがあると思われる。

また，筆者が見る限り，小学生以上の筆記具の持ち方については，望ましい持ち方の子が１クラスの３分の１に満たない劣悪な現状があり，矯正も難しい。これは，初めて筆記具を持って文字を書き始める幼児期に，望ましい持ち方を教わっていないことが後に多大な影響を及ぼしているのではないかと考えている。

そこで，本研究では，将来の書写力にも繋がるであろう，この幼児期における文字指導のあり方を中心に考える。その際，①園での文字指導の実態，②園の保育者の意識，また，③子どもたちの実態や④保護者の意識を，アンケート調査や園における観察によって明らかにする。そして，これら４つの事項に，現行の⑤「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」の定める規定を加えた５つの間のズレを確認する。そのズレを少なくした，幼児期の子どもたちにとって望ましい文字指導のための方策を提案することが本研究の目的である。

2 「幼稚園教育要領」・「保育所保育指針」の文字に関する文言の変遷

「幼稚園教育要領」に初めて“文字”に関する文言が出てきたのは，【昭和 39 年（1964）[1]】である。「第２章　内容・言語」の指導にあたって留意すべき点として，次のようなことが文言として表れる。

> ウ　３に関する事項の指導にあたっては，幼児の年齢や発達の程度に応じて，日常生活に必要なことばに慣れさせ，正しいことばで表現しようとする意欲を目ざめさせ，しだいに正しい言語習慣を身につけるようにし，さらに日常生活に必要な簡単な標識や記号などに慣れさせ，文字への興味や関心をも育てるようにすること。なお，幼児のことばの指導は，聞くこと，話すことを中心として行ない，文字については，幼児の年齢や発達の程度に応じて，日常の生活経験のなかでしぜんにわかる程度にすることが望ましいこと。

※囲み文字・アンダーラインは筆者による。（後述の「幼稚園教育要領」の引用においても同様。）

ここでは，“文字”に関する文言は留意事項に留まり，「興味や関心を育てるように」し，「聞くこと，話すことを中心として」「日常の生活経験のなかでしぜんにわかる程度にする」ということになっている。

それから【平成元年[2]】まで25年間改定はなく，この改定で「幼稚園教育要領」が「健康，人間関係，環境，言葉，表現」の5領域を定める現在の形になった。【昭和39年（1964）[1]】には，留意事項に留まっていたのに対して，この【平成元年[2]】では，その「第2章　ねらい及び内容・言葉」に，

> 2　内容
> (10) 日常生活に必要な簡単な標識や文字などに関心をもつ。

というように内容のなかにもその文言が表れる。上記の取扱いに当たって留意すべき点として，

> 3　留意事項
> (2) 文字に関する系統的な指導は小学校から行われるものであるので，幼稚園においては直接取り上げて指導するのではなく個々の幼児の文字に対する興味や関心，感覚が無理なく養われるようにすること。

と表れている。ここでは，「文字に関する系統的な指導は小学校から行われるものである」とはっきり断言しているのが特徴としてあげられ，「直接取り上げて指導するのではなく個々の幼児の文字に対する興味や関心，感覚が無理なく養われるようにする」ということになっている。

【平成10年[3]】の改定では，「第2章　ねらい及び内容・環境」に，

> 1　ねらい
> (3) 身近な事象を見たり，考えたり，扱ったりする中で，物の性質や数量，文字などに対する感覚を豊かにする。

というように【平成元年[2]】にはなかった「環境」領域にも文言が表れる。その内容に関しては，

> 2　内容
> (9) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。

ということになっており，その取扱いに当たっては，

> 3　内容の取扱い
> (4) 数量や文字などに関しては，日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切にし，数量や文字などに関する興味や関心，感覚が養われるようにすること。

となっている。ここでは，子どもの生活体験に根ざして“文字”への興味・関心，感覚が養われるようにするということが重視されている。

また，【平成元年[2]】に引き続き，「言葉」領域にも文言があり，「第2章　ねらい及び内容・言葉」において，

> 2　内容
> (10) 日常生活の中で，文字などで伝える楽しさを味わう。

と，【平成元年[2]】の「関心をもつ」から“文字”という媒体を通して子どもたちが思ったことや考えたことを「伝える楽しさ味わう」ということになっている。その取扱いに当たっては，

> 3　内容の取扱い
> (3) 幼児が日常生活の中で，文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい，文字に対する興味や関心をもつようにすること。

となっており，【平成元年[2]】の留意事項に出ていた「無理なく」という文言が削除されている。

【平成10年[3]】では，【平成元年[2]】にも見られた「言葉」領域に加え，「環境」領域にも“文字”に関する文言を表したことが特徴としてあげられる。これは，この改定が，旧「幼稚園教育要領」への反省と，少子化，核家族化，都市化などによる幼児の直接体験の不足を考慮して行われたことによる。この【平成10年[3]】の「幼稚園教育要領」の第3章の指導計画作成上の留意事項にも，「幼稚園教育は，幼児が自ら意欲をもって環境とかかわることによりつくり出される具体的な活動を通して，その目標の達成を図るものである。」とあるように，幼児教育が「環境」を通して行われるべき教育になったことの表れであると考える。

最後に現行の【平成20年[4]】の「幼稚園教育要領」は，「環境」領域，「言葉」領域ともに【平成10年[3]】と変わっていない。

改定ごとの文言の変遷を見ると，以上のように「幼稚園教育要領」における“文字”に関する文言は，少しずつ，積極的になっているような印象は受けるが，具体的な文字指導については言及さ

れておらず，現場の捉え方は様々になってしまうと思われる。「保育所保育指針」[5] については，「幼稚園教育要領」の変遷に沿って改定されているのでここでは省略したい。

3　幼児期における文字指導のあり方に関する先行研究

●国立国語研究所編『幼児の読み書き能力』東京書籍　1972[6]

国立国語研究所のこの40年以上前の調査(1967)[6] から，「(当時の) 幼稚園児の約90%は4歳代から，なんらかの形でかな文字を覚え始めること」が指摘されており，また，「幼児期・就学前の教育として，言語指導の中に文字の指導を正しく位置づけ，現実の幼児の活動に合うような正しい指導を行うことは必要不可欠なことになるだろう」とも指摘されている。このことからも，直接的な文字指導は行わないとされる現行の規定では，子どもの実態に即していないと考えられる。

●倉橋克「幼児の文字指導」『金沢大学教育学部紀要　人文科学・社会科学・教育科学編　第23号』 1974[7]

国立国語研究所の調査（1967)[6] を受け，「無理じいしてはならない」「強制してはならない」と幼児期の直接的な文字指導を拒否する考え方に30年以上前から疑問を呈している。

●村山貞雄編『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査―保育カリキュラムのための基礎資料―』 1987[8]

国立国語研究所の調査（1967)[6] に関連して，20年後のこの調査からも，園に通う年齢の子どもたちが「読み」「書き」をしていることがわかる。特に，5歳以上の子どもたちは，ほぼ9割以上が「読み」「書き」を出来ているという調査結果が出ている。

「読み」… 3歳➡22.2%，4歳➡66.3%，
5歳➡91.8%，6歳➡97.9%
「書き」… 3歳➡11.0%，4歳➡58.3%，
5歳➡89.8%，6歳➡97.7%

●島尾朝児「幼児期の文字教育について―書き言葉の土台づくりとして―」 1989[9]

「幼稚園教育要領」の曖昧さにより，どの園でも組織だったカリキュラムにもとずく指導がなされていないのが一般で，幼児期の文字指導の実態は多様化していると指摘する。

●塩出智代美「幼児期における書字指導（上)」1992[10]

幼児の姿勢や筆記具の持ち方，筆順に問題が生じていると指摘する。

●水野浩志『改訂新版　新幼児教育概論』2000[11]

「幼稚園教育要領」の考え方は，文字に関して幼稚園も教育の一端を担う必要があるという考えに変わってきていると指摘する。

●市原陽子，齋木久美「幼稚園児の書字指導に関する一考察」 2008.3[12]

水野氏[11] の指摘に対して，4・5歳の幼児の多くは，平仮名の読み書きが出来る実態を反映した部分もあるが,【平成10年】の「幼稚園教育要領」において規定がないこともあり，幼稚園教育においては，書字に関する系統的な指導は行われていないと指摘している。

以上のように，先行研究からみても，今から40年以上も前から幼児期の文字教育の必要性が指摘されているにも関わらず，そのあり方については，子どもたちの実態に即さず，今日でも未だに曖昧な部分が多く，はっきりと確立されていないことがわかる。

4　園における文字環境・文字指導についての実態観察

4－1　文字環境について

福岡県宗像市内の幼稚園2園，保育園1園，計3園を回り，年長児の教室に焦点を絞って調査した。そこで明らかとなった問題点が2つある。

問題点1…文字環境自体が乏しい。

3園共通して教室にある，子どもたちの名前以外の文字といえば，「おたんじょうびおめでとう」くらいである。その他には，物への名札や，日にち，歌の歌詞等が見られたが，園によってそれぞれであった。50音表が掲示してある園は3園中1園に過ぎなかった。

問題点2…手書き文字が非常に少ない。

ほとんどパソコンを使った活字，しかも，ポップ体などの丸字で書かれている。園の環境を“かわいらしく”，子どもたちに親しみやすいようにという配慮であることがうかがえるが，そのような安易な大人の感覚で文字感覚に乏しい環境を構成することだけでは，環境を通して行うべき幼児

教育としては不十分であると考える。

園で多く見られたポップ体

幼児期の教育というのは，“環境”を通して，また，“遊び”を通して行うことが大きな特徴である。しかし，文字環境を意識的に整え，文字を用いた遊びや活動を日常的に積極的にしている園は少ないと考えられた。

4－2　七夕の短冊作りから見られる文字指導について

多くの園では7月7日の七夕の際，短冊に願い事を書かせ，七夕飾りを作る。従って，福岡県宗像市内の幼稚園2園，保育園1園に文字指導に関する活動の1つである七夕の短冊作りについてインタビューし，また，その短冊を七夕終了後にデータとして採取し，分析を行った。

3園それぞれ，全て家庭に任せている園，インタビュー形式で聴き，文字部分は保育者が代筆する園と様々で，文字指導の実態の多様性がうかがえた。しかし，3園ともに年長クラスの短冊は子どもたち自らが文字を書く傾向が見られたこと，また，【幼稚園B】では，園において文字を書かせていることから，年長になるとほとんどの子どもたちが文字を書けるようになっていることが分かる。その際の指導は，家庭や保育者に任せている状況があり，その際の指導の仕方が特に重要であると考える。

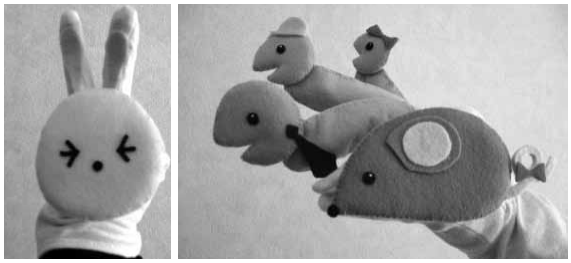
幼稚園B

5　書くときの姿勢・筆記具の持ち方指導の実践と保護者へのアンケート調査

5－1　実践内容

宮崎県書道協会主催のイベントで体験教室の講師を努めた際，“筆記具の持ち方と姿勢”において提案した替え歌と「かわいいコックさん」の絵描き歌による線を引く練習の実践を，4歳から小学5年生の子どもたち1回20名を8回，計160人に対して行った。

このイベントでは，パワーポイントによる映像とメロディー，指人形等，子どもたちがより理解しやすいような教材を開発した。



指人形（左手：右手）

パワーポイント（一部）

5－2　アンケート調査（引率者向け）について

このイベントの際，参加した子どもたちの引率者向けにアンケート調査を行った。

※　引率者…保護者（父・母など）
　　幼稚園・保育園の関係者（幼稚園の教諭・保育士）

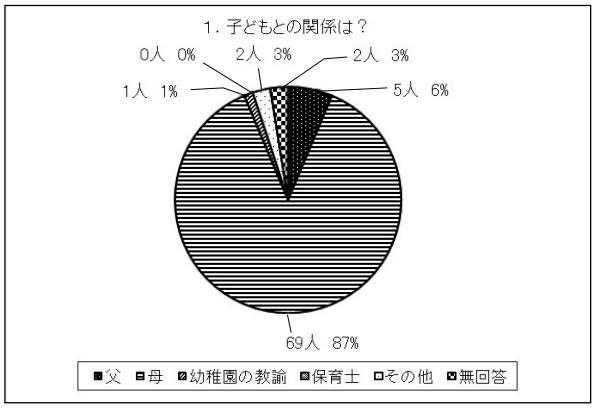
質問項目の観点

①イベントについての評価
②保護者や保育者の文字指導に関する価値観
③子どもの実態
④家庭や園での文字指導の実態

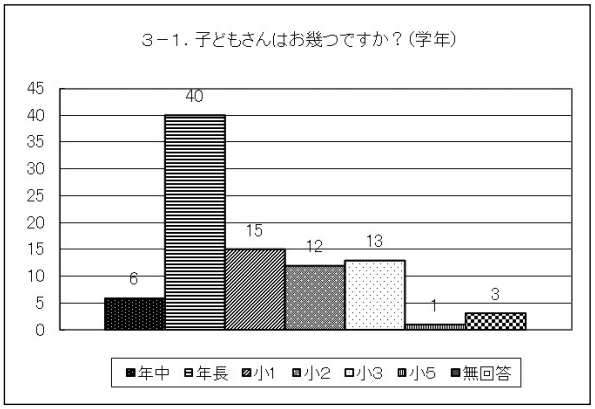
5－3　アンケート調査の結果と考察

回答数は79である。

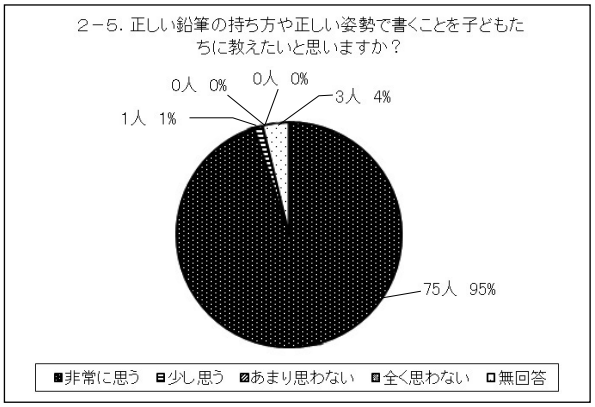
アンケートの有効回答者については，子どもとの関係を質問したところ*1*のグラフのように，園の関係者は1人のみであったため，保護者のみをデータとして扱うこととした。



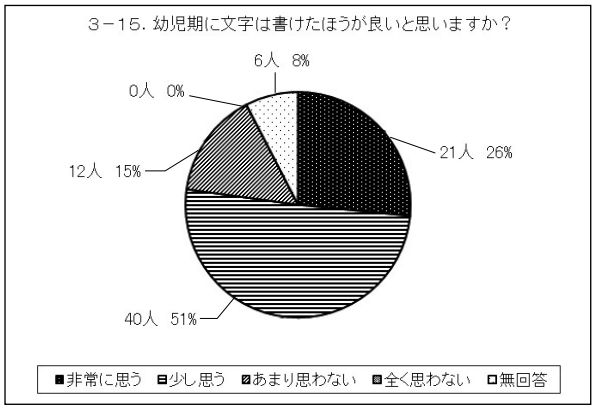
また，***「子どもさんはお幾つですか？（3－1）」***の質問に対して，年長児を持つ保護者が40人と最も多く，研究対象としてふさわしい年齢の保護者だったため，この研究に適した結果が期待された。



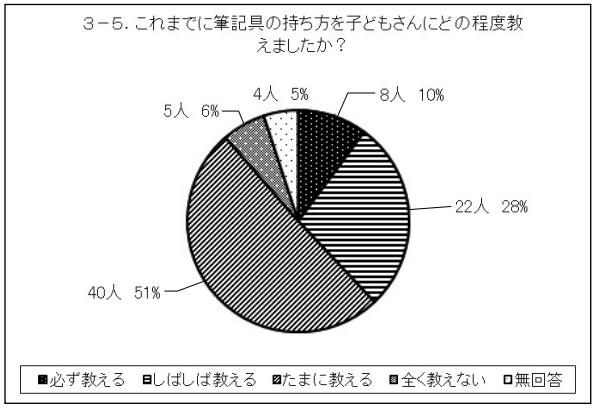
このアンケートの全体的な考察としては，イベントについての評価は肯定的な結果が得られ，やはり保護者の子どもたちへの文字指導に関する興味や要求は非常に高いということがわかった。特に，***「正しい鉛筆の持ち方や正しい姿勢で書くことを教えたいと思いますか？（2－5）」***の質問に関しては，95%（79人中75人）の保護者が“非常に思う”と回答しており，非常に高い割合を示した。

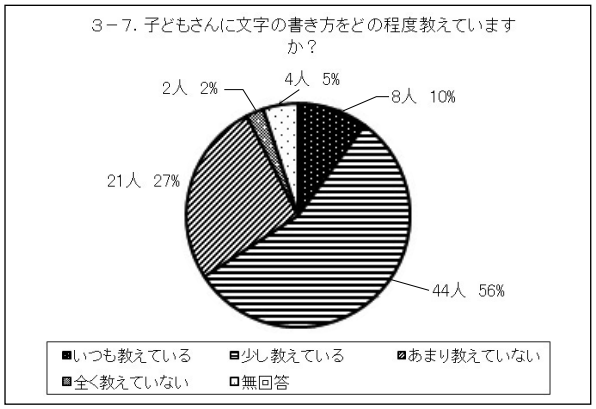


しかし，***「幼児期に文字が書けたほうが良いと思いますか？（3－15）」***の質問に対しては“非常に思う”が26%（79人中21人），“少し思う”を加えると77%（79人中61人）と高い割合は示すが，95%には及ばない。幼児期のうちは，文字は書けなくても良いが，鉛筆の持ち方や姿勢といった基本的な部分は最低限しっかり子どもに身に付けてもらいたいという保護者の思いがうかがえる。

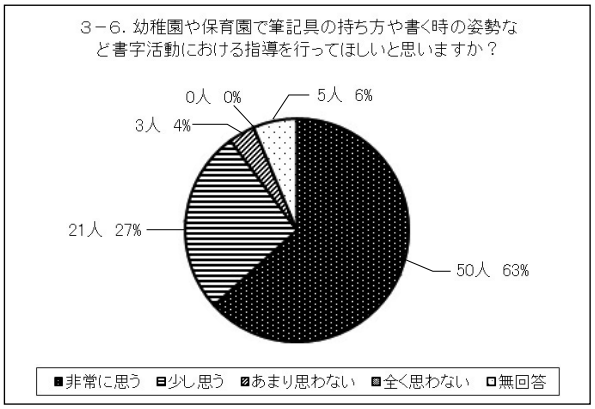


これに関して，家庭での指導の実態を見てみると，***「これまでに筆記具の持ち方を子どもさんにどの程度教えましたか？（3－5）」***の質問については，“必ず教える”という保護者は10%（79人中8人），***「子どもさんに文字の書き方をどの程度教えていますか？（3－7）」***についても“いつも教えている”と回答した保護者が10%（79人中8人）と非常に少ないことから，子どもの筆記具の持ち方の習得や文字を書くことへの保護者の要求は高いが，いざ自分が家庭で教えるとなると自信がなく教えられなかったり，そこまで指導が行き届かなかったりするのであろうと考える。





また，*「幼稚園や保育園で筆記具の持ち方や書く時の姿勢など書字活動における指導を行ってほしいと思いますか？（3－6）」*という質問に対して，行ってほしいと“思う”（“非常に思う”“少し思う”）保護者が90%（79人中71人）と高い割合を示したのは，家庭でしっかり教えられない分，園への要求や期待が高まっているからであると言える。



6　幼稚園・保育園へのアンケート調査

6－1　調査内容

4・5の調査結果を受け，園における文字指導の現場の声を聴きたいと考えた。そこで，主に福岡県下の幼稚園100園，保育園100園，計200園にアンケートを発送した。

質問紙の観点

①園の先生方の文字指導に関する価値観や意識の把握

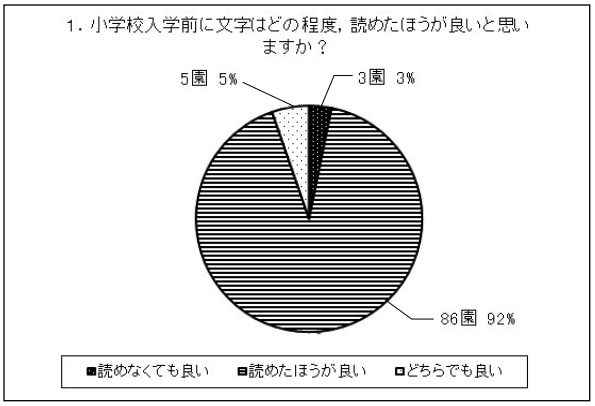
②子どもたちの実態，園での文字指導の実態の把握

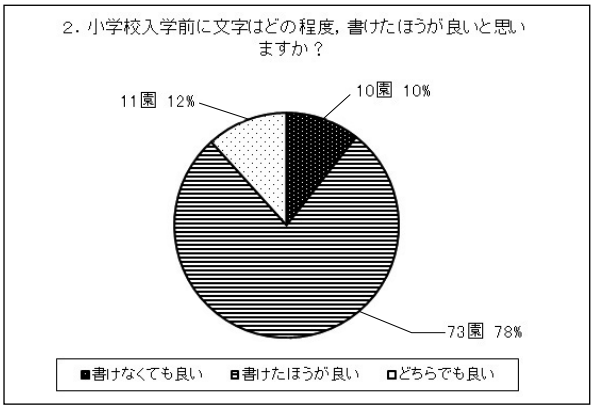
6－2　結果と考察

回収率は，47%である。（幼稚園52園，保育園42園の計94園）

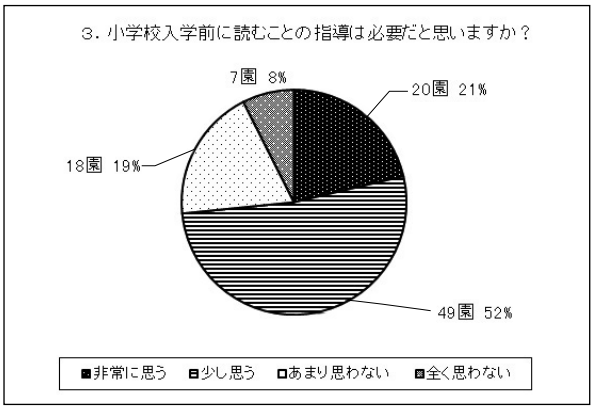
①園の先生方の文字指導に関する価値観や意識

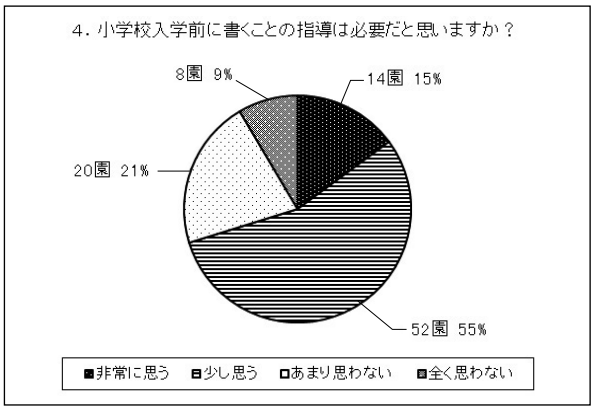
「読み」に関しては*「小学校入学前に文字はどの程度，読めたほうが良いと思いますか？（1）」*の回答より92%（94園中86園），「書き」に関しては*「小学校入学前に文字はどの程度，書けたほうが良いと思いますか？（2）」*の回答より78%（94園中73園）と，「読み」「書き」ともに小学校入学前に習得しておいた方がいいと考える先生方が多かった。これは，文字指導をしないことを前提とした幼児教育に携わる先生方の回答としては予想よりはるかに高い数字であった。



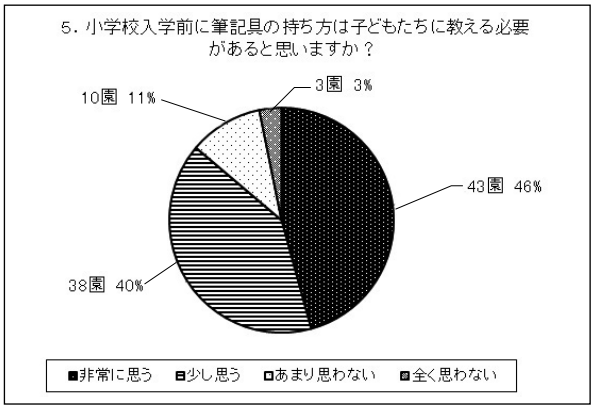


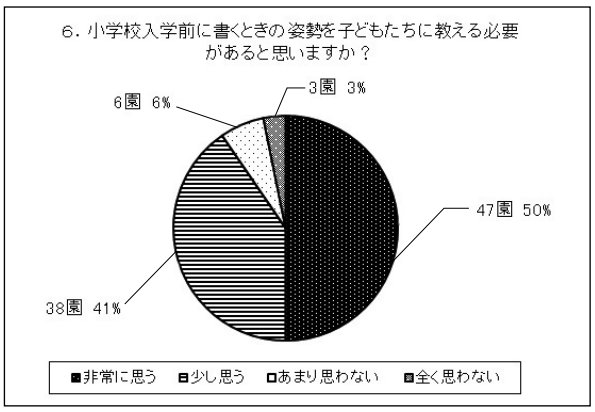
また，その「指導」に関しても，*「小学校入学前に読むことの指導は必要だと思いますか？(3)」*に対して“必要だ”（“非常に思う”“少し思う”）と回答した園が73%（94園中69園），*「小学校入学前に書くことの指導は必要だと思いますか？(4)」*に対して70%（94園中66園）と肯定的・積極的な回答が多い。



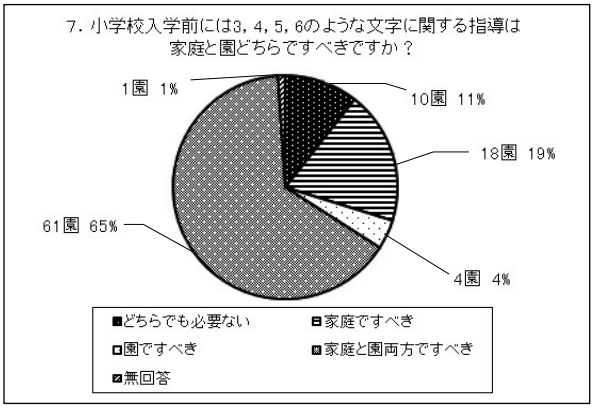


特に，「鉛筆の持ち方」の指導に関しては***「小学校入学前に筆記具の持ち方は子どもたちに教える必要があると思いますか？（5）」***に対して86%（94園中81園），「書くときの姿勢」は***「小学校入学前に書くときの姿勢を子どもたちに教える必要があると思いますか？（6）」***に対して91%（94園中85園）と肯定的･積極的な価値観や意識（“非常に思う”“少し思う”）の割合が非常に高い。“非常に思う”だけに注目しても，“鉛筆の持ち方”が46%，“書くときの姿勢”が50%と半数に近い割合を示している。この結果からも，園の先生方の文字指導に関する価値観や意識はとても高いことが分かる。





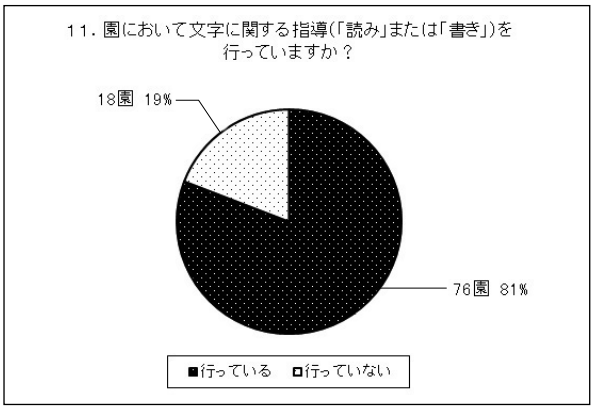
そして，***「小学校入学前には3，4，5，6のような文字に関する指導は家庭と園どちらですべきですか？（7）」***という質問に関しては，“家庭と園両方ですべき”だと回答している先生方が65%（94園中61園）と最も多かった。また，“園ですべき”という回答も含めると，69%（94園中65園）と7割近くの園の先生が文字に関する指導は園においても委ねられているものだと認識しているということが分かる。



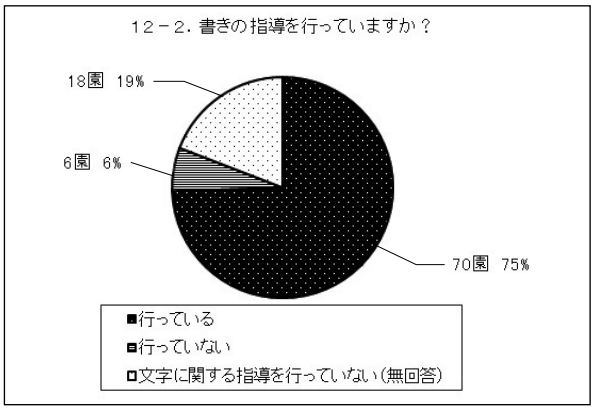
②子どもたちの実態，園での文字指導の実態

子どもたちの実態としては，村山氏の調査[8]とほとんど一致し，園に通うほとんどの子どもたちが「読み」「書き」を行っていることが確認できた。

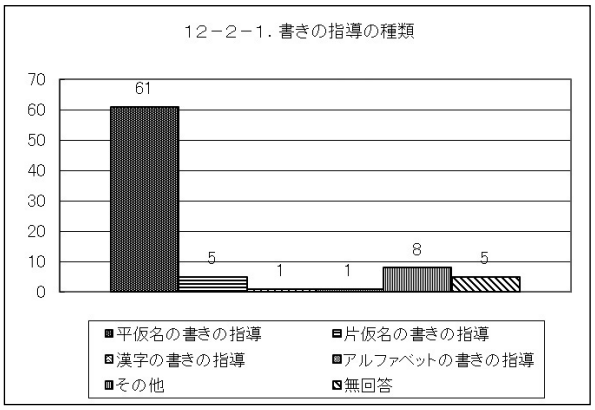
また，園での文字指導の実態も，***「園において文字に関する指導（「読み」または「書き」を行っていますか？（11）」***の質問に対して，81%（94園中76園）と，「読み」「書き」含め何らかの形で行っている園は極めて高い。その具体的なことについては，ここでは，「読み」「書き」のうち「書き」に焦点を当てて以下述べていきたい。



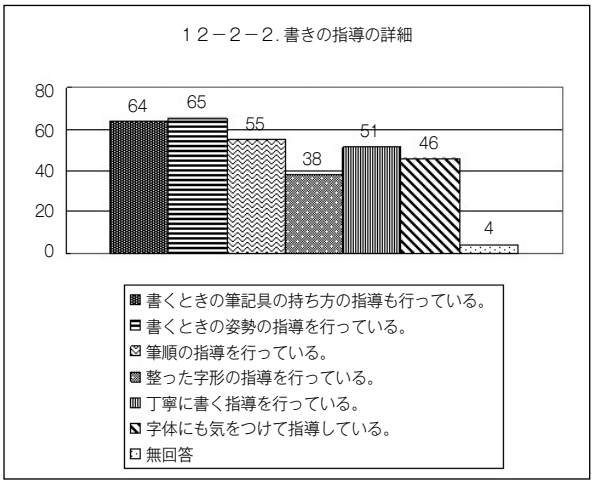
*「書きの指導を行っていますか？（12－2）」*に対して75%（94園中70園）の園が“行っている”と回答しており，「書き」の指導が多数の園で行われていることが分かる。



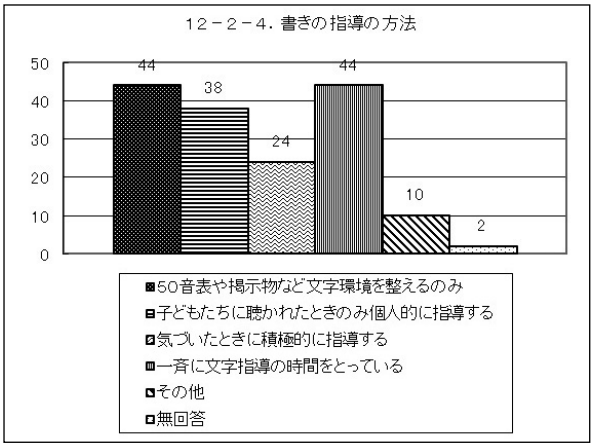
*12－2－1*でその種類を質問したところ，やはり“平仮名”が87.1%（70園中61園）と圧倒的に高かった。

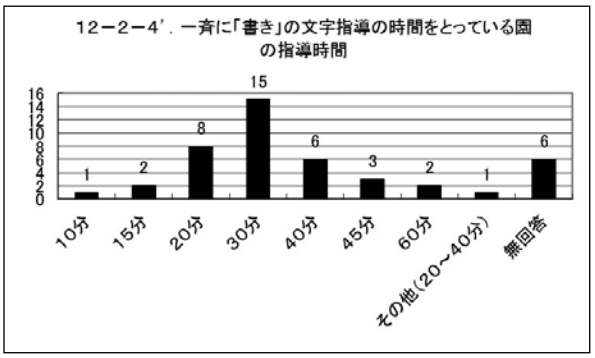


「書き」の指導を行っている園の***指導の詳細（12－2－2）***については，“筆記具の持ち方”“書くときの姿勢”において特に多くの園で行われているという結果が得られた。“筆記具の持ち方”については91.4%（70園中64園），“書くときの姿勢”については92.8%（70園中65園）とどちらも9割を超える実施率であった。“筆順”に関しても78.5%（70園中55園）と8割に近い園が行っており，指導のレベルの高さがうかがえる。

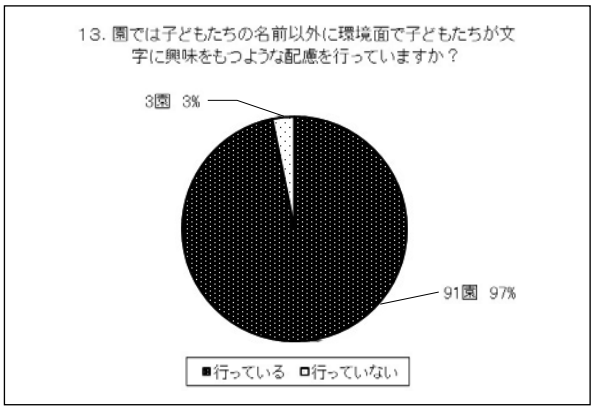


また，注目すべきは，その***指導方法（12－2－4）***である。“一斉に文字指導の時間をとって行う”園が「書き」の指導を行っている園の62.8%（70園中44園），全体で換算しても46.8%（94園中44園）と半数に近い園で「書き」の一斉指導を行っていた。この一斉指導の***頻度***は，平均して週に約1.5回，1回あたり約30.9分の指導***（12－2－4'）***の実態が明らかになった。外部講師が行っている園も一斉指導をしている44園中11園（25%）ある。国による規定では直接的な文字指導は園では行わないことになっている。しかし，半数の園では，「書き」の文字指導を一斉に時間をとって行っているのである。

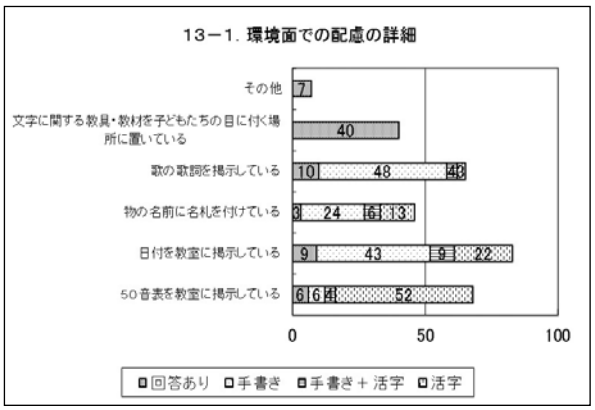




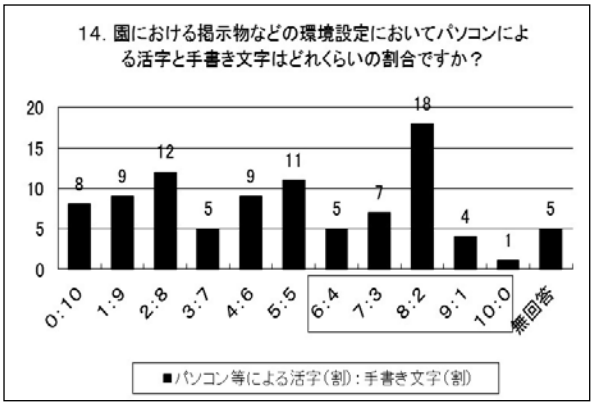
また，***「園では子どもたちの名前以外に環境面で子どもたちが文字に興味をもつような配慮を行っていますか？（13）」***という園での文字環境についての質問に対して，配慮を“行っている”と回答した園は97%（94園中91園）と100%に近く，環境を通して行うべき幼児教育の浸透がうかがえる結果となった。



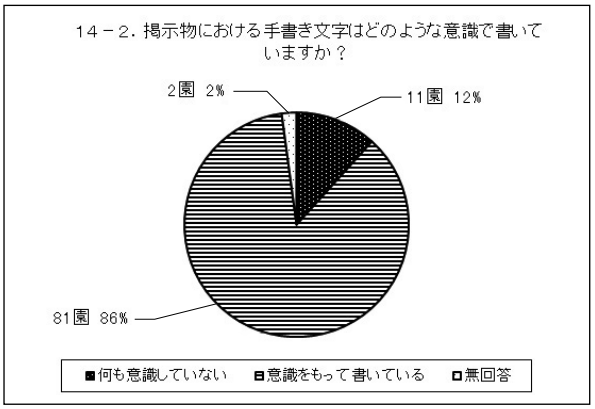
しかし，***環境面での配慮の詳細（13－1）***を質問したところ，“文字に関する教具・教材を子どもたちの目に付く場所に置いている”園が全体の42.5%（94園中40園）と5割にも満たない実態は，園の環境設定としては乏しいと考える。



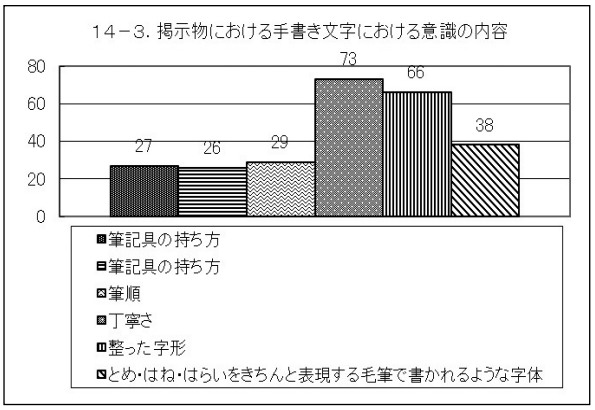
また，***「園における掲示物などの環境設定においてパソコンによる活字と手書き文字はどれくらいの割合ですか？（14）」***という質問に対して，パソコンによる活字と手書き文字の割合は，手書き文字のほうが少ない園が37.2%（94園中35園）と4割に近い割合であることは，現代ならではの問題であり，決して“環境”や“遊び”を通して行う幼児教育としては十分とは言えない。文字に興味をもち，文字感覚の敏感になっているこの時期にこそ，パソコンによる活字からだけでは得られない手書き文字による豊かな文字感覚を育むべきではないだろうか。



そして，手書きで文字を書く際の意識について***「掲示物における手書き文字はどのような意識で書いていますか？（14－2）」***という質問をしたところ，86%（94園中81園）の先生方が“意識をもって書いている”と回答し，好ましい実態であった。



その***意識の内容（14－3）***としては，“丁寧さ”や“整った字形”を意識するという先生が比較的多かったが，“とめ・はね・はらい等をきちんと表現しよう”という書写的意識をもつ先生は，手書きする際に“意識をもって書いている”と回答した先生の中でも46.9%（81園中38園）と半数にも満たなかった。

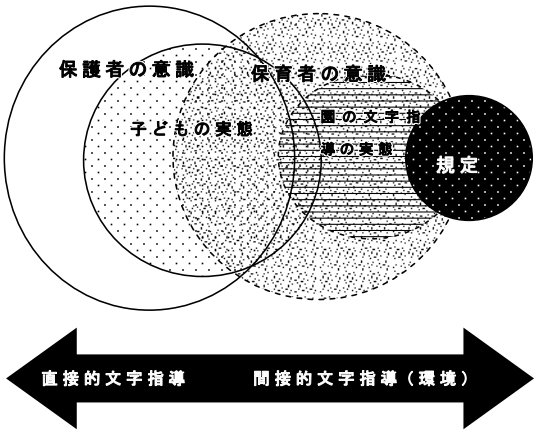


国の規定では文字に関し直接的な指導は園において行わないことになっているが，現状に全く

合っていないことが明らかとなった。このアンケート結果からも分かるように，子どもたちの実態やそれに伴う園の先生方の価値観や意識からかなりの割合の園で独自に文字指導を行っている現状がある。このことは，子どもたちが小学校に入学した時に園による文字習得の格差を生じかねない。

7　アンケート調査や園における観察から見られた問題点と課題

ここでは，これまでの調査を全て踏まえ，問題点と課題を述べる。その大きな問題点として，本研究のねらいの１つ目であった，５つの間のズレが明らかになったということである。その関係を図に示した。



円の大きさ…文字に関することの習得の必要性または習得の実態の度合い

子どもたちの実態をより身近で感じている保護者や保育者が考える習得の必要性の度合いと最もかけ離れているのが規定である。また，園の文字指導の実態は，規定の影響により必要性の度合いは保護者や保育者よりも小さいが，保護者の要求や子どもたちの実態や，小学校入学後のことも考え，規定よりも習得の必要性の度合いが大きくなっていると考えられる。

左右の位置関係…求める文字指導のあり方

“文字”に対する感覚や興味・関心を養う程度で，直接的な指導は求めていない規定に対し，保護者は，より直接的な文字指導を求めている。ともすると，子どもの実態以上のことを求めていると考えられる。保育者や園の文字指導の実態は，基本的には規定通り間接的な文字指導を行いたい傾向があるが，保護者の要望や子どもの実態，小学校入学以降のことを考えると，現状としては，規定よりも直接的な指導をしていると考えられる。また，子どもたちと長い時間接している保育者は，より直接的な文字指導を求めていると考えられる。

本研究でのアンケート調査を基盤にした考察により，肝心な子どもの実態や保護者の意識とのズレが大きいのが現行の規定だと考える。園や保育者は，独自に文字指導を行っていることが多いが，規定に具体的なことが記載されていないため，その狭間で，どこまで教えたらいいのか困惑している状況が少なからずあると考える。これらの大きなズレをどう埋めていくのかが今後の課題である。

また，子どもの実態を踏まえて保･幼･小がしっかり連携をとっていくことも課題である。そうしなければ，現行の規定では，同じ小学校に来る子どもの中でも園によって実態に差が生じてしまいかねない。園では，幼児期に文字指導は必要ないと決め付けたり，逆に，小学校教育の前倒しのような文字指導を行ったりするのではなく，子どもたちの興味・関心・意欲を大切にし，将来の書写力につながる，幼児期ならではの，子どもたちが楽しく主体的に行えるような文字指導を考えていくべきだと考える。

8　おわりに

筆者は２つの方策を提案したい。

１つ目は，「幼稚園教育要領」･「保育所保育指針」，少なくとも解説には，“筆記具の持ち方指導”や“書くときの姿勢指導”の規定を加えることである。

現行の規定では，保護者や園へのアンケート調査，また，小学校での実態を踏まえると，子どもたちの実態に即していないことがうかがえる。それでは，園や保育者は規定との狭間で混乱し，子どもたちにとって望ましい文字指導は望めない。また，もし，このまま規定に加わらない場合には，保幼小が連携をとり，幼稚園・保育園において必ずこれらの指導を行うことが望まれる。小学校も幼稚園・保育園も，“小学校で指導すべきことは小学校に入学してから一からしていけばいい”という意識ではなく，成長・発達は個によっても違い，つながっているものであるので，子どもたちにとって初めて鉛筆を持つ幼児期に，これらのことは最低限指導すべきだと考える。

幼児教育は，“環境”“遊び”を通しての教育と言われる。従って，2つ目の提案は，もっと園の文字環境・文字活動を豊かなものにすることである。パソコンばかりに頼ることなく，手書き文字を教室内に増やし，子どもたちが文字から刺激を得られるような環境づくりや活動を行うべきだと考える。また，年長児にもなると文字を書きたい意欲をもつ子が増えてくる。その際に，ただの小学校の文字指導の前倒しのような指導ではなく，絵本やしりとり，文字カード等，文字に関する多くの教具･教材を準備し，幼児教育ならではの“環境”“遊び”を通して，子どもたち主体で楽しく行えるような文字指導を園では行うべきであると考える。さらに言えば，伝統的な毛筆による手書き文字にも触れさせ，「毛筆遊び」を取り入れることにより，さらに有意義な文字活動となるのではないだろうか。「毛筆遊び」をすることで，墨の香りや毛の感触など幼児期の子どもたちにとって様々な感覚を体験させられる。文字をただ書かせるだけの文字指導ではなく，様々な用具・用材を使用した，子どもたちの心も身体も豊かにできる文字指導を心がけるべきである。

幼稚園・保育園は義務教育ではないとしても，就園率 97 ～ 98% となった今日，文字指導に関しても実態に合った教育を見直すべきだと考える。

その早急な方策として，以上の2つのことを提案する。文字を書くという行為に初めて出会う幼児期に，これらの教育を充実させ，将来の書写力につながる教育を目指さなければならない。今こそ，その一歩を期す時ではないだろうか。

【主な引用・参考文献】

1／2／3／4　文部科学省『幼稚園教育要領』 昭和 39 年／平成元年／平成 10 年／平成 20 年
5　厚生労働省『保育所保育指針』
6　国立国語研究所編『幼児の読み書き能力』 昭和 47 年（1972） 東京書籍
7　倉橋克「幼児の文字指導」
『金沢大学教育学部紀要　人文科学・社会科学・教育科学編　第 23 号』 昭和 49 年（1974）
8　村山貞雄編『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査―保育カリキュラムのための基礎資料―』
1987 サンマーク出版
9　島尾朝児「幼児期の文字教育について―書き言葉の土台づくりとして―」
1989 『拓殖大学論集―人文・自然科学系―　№ 177』
10　塩出智代美「幼児期における書字指導（上）」『書道研究』 1992 （萱原書房）
11　水野浩志『改訂新版　新幼児教育概論』 2000　ブレーン出版房
12　市原陽子，齋木久美「幼稚園児の書字指導に関する一考察」 2008.3 『書写書道教育研究』第 22 号
・野原由利子，栗本恭仁子「「話しことば」から「書きことば」への発達援助に関する研究―モンテッソーリ言語教育法に学んだ保育実践をふまえて―」 2005 『愛知江南短期大学紀要　第 34 巻』
・内田伸子著『発達心理学　ことばの獲得と教育』 2006　岩波書店
・村田孝次著『幼児の書きことば』 昭和 49 年　株式会社培風館
・飛田多喜雄，野地潤家監修『国語教育基本論文集成 第 20 巻 国語科言語教育論（2）文字･漢字･書写指導論』
1993　明治図書出版
・小田豊，今井美紀「幼教課程における保育内容指導に関する基礎的研究（3）―幼児期の文字指導の実態調査を通して―」『滋賀大学教育研究所紀要』№ 19 1985
・大庭重治「就学前後の平仮名書字における誤字の発生とその変化」
『上越教育大学研究紀要　第 22 巻 第 2 号』 2003
・森繁敏「幼児の文字学習とその指導の問題に関する一研究」
『人文学報　第 130 号』東京都立大学人文学部　教育学　1978.3
・依田明，鈴木乙史，清水弘司，宮前理「横浜市における幼児教育の実態」
『横浜国立大学教育紀要 17』 1977.11
・小林比出代「未就学児の硬筆筆記具の持ち方に関する一考察―書写教育の視点から」
『書写書道教育研究　第 23 号』 2009
・永江誠司『世界一の子ども教育モンテッソーリ― 12 歳までに脳を賢く優しく育てる方法―』
2010.3　株式会社講談社
・東京書籍，教育図書，教育出版，大阪書籍，学校図書　小学校国語科（書写）教科書